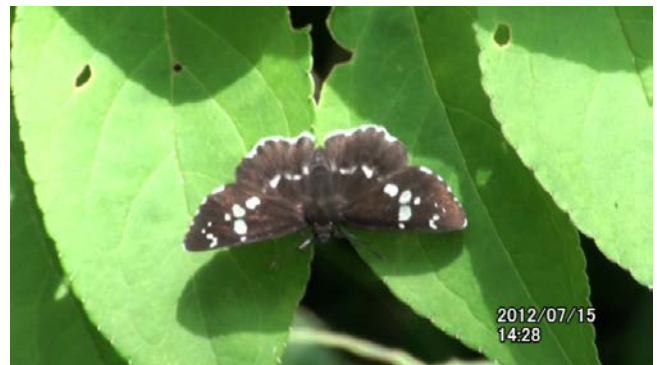


大名とは、またずいぶんりっぱな名前をつけてもらったものだが、その由来はよく分かっていない。日本産チョウの学名や和名に関してその由来を考察した、今井彰著「帝揚羽蝶 命名譚」（草思社、1996）という面白い本があるが、学名 *Daimio tethys* の属名 *Daimio* は 1871-1888 年の間、日本でチョウを採集したヘンリー・プライヤー（H.Preyer）から標本を提供してもらった「日本産蝶類目録」（1876）中の 8 種にその名をとどめているマーレー（R.P.Murray）というイギリスの牧師が命名したとのこと。この時期、すでに日本に大名は存在していなく、なぜ *Daimio* と命名されたのかは謎のままというわけ。

筆者が 1954 年に昆虫少年を始めた高知市五台山にこのダイミョウセセリはいなく、自転車を駆って高知市郊外にまで行動範囲を広げた中学生以降になって、小高坂山や円行寺という当時のチョウの多産地で初めて目にしているはずだが、正確な記録はない。円行寺は蛇紋岩地帯で、少なくとも 1960 年代まではチャマダラセセリが春、夏と 2 度安定して発生していたところだが、今は絶滅している。

セセリチョウ科のほとんどは、花蜜を求めるときや植物葉上などに静止休息する場合、4 枚の羽を硬く閉じるか、あるいは広げるときは、前翅が斜め 45 度くらいで後翅はそれよりやや深い斜め角度に広げた、セセリチョウ科独特の体勢をとるが、このダイミョウセセリはみごとに水平に羽を広げて見せてくれる。その翅表には黒地に白い斑点模様があるのだが、地域によって後翅の白紋がまったく消えてしまうという実に興味のある 2 型をもつチョウでもある。その違いは福井県中部と三重県中部を境界として、東側で白紋が消失する。下に実際の映像記録を示そう。



左は糸魚川市内のイタドリの花で朝 7 時半頃に求蜜中、右は兵庫県神鍋高原で撮影記録したものである。

このチョウは、会いたいから何時どこへ行こう、とって確実に出会えるような種ではなく、かといってめったに会えないというような希少種でもない。この HP の「チョウとの出会い」になかなか登場させることができなかつたのは、上の、両タイプの撮影記録がそろいのを待っていたというのが真相。

幼虫がヤマモ類の葉をたべるので、ヤマモが多く自生するような山道沿いなどでみることができる。神鍋高原の個体をみた周辺道路沿いにはヤマモがたくさん自生していて、食痕らしき穴のあいた葉っぱもみられたが、幼虫の姿は確認できなかった。そして、この個体はそのヤマモのある場所に固執しているような飛翔行動を示し、撮影時に近寄りすぎると飛びたつて、ときには葉裏に身を隠すがその位置は数メートルも離れていなく、そのときも羽を広げて止まる。葉裏では撮影しづらいので驚かせて再度飛び立たせると、すぐ近くの葉っぱ上で翅表全開姿勢をとってくれるなど、しばらく撮影モデルをつとめてくれた。